

令和元年6月10日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04237

研究課題名(和文) 帝国大学農学部の形成と展開に関する研究 九州帝国大学農学部を中心として

研究課題名(英文) A study on the formation and development of the faculty of agriculture of Imperial Universities : focusing on the Faculty of Agriculture of Kyushu Imperial University

研究代表者

藤岡 健太郎 (Fujioka, Kentaro)

九州大学・大学文書館・准教授

研究者番号：00423575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：帝国大学農科大学・農学部がどのように形成され、それぞれがどのように教育・研究活動を展開していたのかを解明することが本研究の目的であった。具体的な成果は以下の3点である。学科・講座・附属施設の設置状況を中心とした帝国大学農学部の形成と展開の過程の解明。4帝国大学農学部教官履歴データベースの作成と、それをを用いた農学部教官人事の特徴の解明。農学府附属演習林財政と帝国大学財政全体の関係性の解明。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで各大学年史等でそれぞれの農学部組織の設置状況等は記述されてきたが、4帝国大学全体を見渡したときにどのような特徴や共通性が見いだせるかについて初めて明らかにした。

農学部教官の履歴を明らかにすることで、大学ごとの教官人事の特徴等を示すことができた。

これまで大学史ではあまり着目されていなかった農学部附属演習林について、その大学財政上の重要性について初めて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to elucidate how the faculty of agriculture of Imperial Universities were formed and how each developed educational and research activities. The specific results are the following three points; 1)Elucidation of the process of formation and development of the faculty of agriculture of Imperial Universities, focusing on the setting situation of department, course, and facilities. 2)Creation of a database of professors' history, and elucidation of characteristics of personnel affairs using it. 3)Elucidation of the relationship between the university forest finance and Imperial University's whole finance.

研究分野：大学史・アーカイブズ学・日本近代思想史

キーワード：帝国大学 農学部 演習林 教官人事

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### 研究の学術的背景

明治維新以降、日本は近代化を進め、第2次世界大戦の敗戦までに急激な工業化を行い、世界の大国の仲間入りを果たした。このことは敗戦後の高度経済成長の前提となったことであるが、戦前期の日本は、労働人口で最も多かったのが常に農業であるなど、欧米の先進工業国に比べれば農業国としての性格を強く持ち続けたと言える。それは一方で、日本の経済・政治・社会・文化に農業が極めて大きな影響を与えていたことを意味するのであり、それゆえ農学教育・農学研究が、戦前期日本の教育・研究の中で、非常に重要な位置と大きな比重とを占めることとなった。中でもとりわけ、帝国大学農学部は日本における農学教育・研究の最高学府だったのであり、戦前期日本の農学教育・研究を牽引していた。そのため、帝国大学農学部の形成と、教育・研究の展開過程を明らかにすることは、重要な意義を持つと言える。

帝国大学農学部についてはこれまで、各大学の年史等でその歴史について述べられてきた。農学部を有していた帝国大学のうち、九州・北海道・東京・京都・東北(東北帝国大学から東北大学に改称後の1947年設置)についてはそれぞれの年史があり、農学部の部局史もある。これらから、各農学部の沿革・教育・研究の状況等についてはかなり明らかになっている。また、農学部やその附属農場・演習林等における教育や研究の状況等について、個別の研究も少なからず行われてきており、研究の若干の蓄積はすでにある状況である。このように農学部についてのこれまでの研究から、各農学部の歴史や教育・研究の特徴等について、ある程度は明らかになっている。

以上の研究には、本研究の研究代表者藤岡と研究分担者折田も、『九州大学演習林百年史』に農学部や演習林に関する論文を寄稿することで参画しているが、その過程で気づいたのが、各農学部がどのような特徴を有していたのか、他帝大農学部との比較に基づいて明らかにした研究はほとんどない、ということである。そもそも各農学部はその形成から、それぞれ独自の歴史を有している。各農学部は異なる形成過程を経たことで、その後の展開もそれぞれ異なった歴史をたどることになった。それゆえ、それぞれの独自の歴史的展開により、その特徴が形成されていったはずである。したがって、ある帝大農学部の特徴を明確にするためには、これまで十分に行われていない、他帝大の農学部との比較検討が必要である。

本研究はこのような背景から着想されたものである。

### 2. 研究の目的

本研究では、3番目に設置され、それまでの東大・北大農学部とは明らかに異なる形成・展開過程をたどった九州帝国大学農学部を中心として、各帝大農学部を比較しながらその特徴を明らかにすることを基軸とする。九大農学部の場合、その設置に先立って演習林が設置される、前身となる学校等をもたない、初期の教官の多くが東大出身者である、多数の高等農林学校卒業者が入学している、といった特徴がある。こうした特徴をさらに追究した上で、そこで明らかになった特徴と、他帝大農学部を比較し返すことで、他帝大農学部の特徴をも明らかにする。

さらにこうした比較検討を行うことにより、帝国大学農学部の全体像を探り、その歴史的意義が具体的にどのようなものであったのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1)各農学部の創設経緯と沿革、(2)教育・研究体制、(3)大学全体との関係、(4)地域社会との関係、のサブ・テーマを設定し、まずこの4点について各農学部それぞれについて検討・解明する。その上で、サブ・テーマごとに各農学部を比較検討し、それぞれの特徴を明らかにし、帝国大学農学部の全体像をも描き出すようにする。

(1)については各大学の年史等に負いつつ、それぞれの前史から創設、新制大学への移行に至るまでの沿革を明らかにする。

(2)では、学科・講座の設置状況から各農学部の教育・研究体制の特徴を明らかにする。あわせて、教官人事から、各農学部の特徴を明らかにする。

(3)(4)については、農学部の中でも特に大学財政上重要であり、また本部所在地以外の地域社会とのつながりのあった演習林に着目し、農学部と大学全体・地域社会との関係を考察する。

### 4. 研究成果

(1)学科・講座・附属施設の設置状況を中心とした帝国大学農学部の形成と展開の過程の解明  
東大は駒場農学校等を前身とし、1890年に帝国大学農科大学となった。一方北大は札幌農学校を前身とし、1907年に東北帝国大学農科大学となったのち、1918年に北大として独立した。両者は日本の農学部のフロント・ランナーと言える存在であるが、学部制が発足した1919年段階では、東大は獣医学科と水産学科に優位性が認められる。

このうち1919年に九大、1923年に京大にそれぞれ農学部が設置されたが、両者の特徴は農学部よりも先に演習林が設置されたことにあった。また、九大は東大をモデルとした学科・講座構成をとっていると考えられるが、京大は構成・名称ともに独自性を示そうとしたことがうかがわれる。

1920年代後半から1930年代前半にかけては農学部に関して大きな変動は見受けられないが、

1937年に日中戦争が始まると、それまで東大にしかなかった水産学科が北大・九大にも設置されるなど、農学部の拡張が行われた。敗戦後には外地演習林をすべて喪失したが、一方で学科増設等の拡張は、戦時期に引き続き行われた。その結果、それまで大学ごとにあった学科構成の特徴が薄まり、各大学間の共通性が強まった。

これまで各大学年史等でそれぞれの農学部組織の設置状況等は記述されてきたが、以上のように、帝国大学全体を見渡したときにどのような特徴や共通性等が見いだせるのかについて初めて明らかにした。

## (2) 帝国大学農学部教官履歴データベースの作成と、それをういた農学部教官人事の特徴の解明

帝国大学農学部教官(教授・助教授)の履歴について、在職期間、出身大学等、前職・後職、海外留学、担当講座等を示したデータベース「帝国大学農学部教官人事一覧」を作成した。

このデータベースを用いて、各農学部において、教官人事の特徴がどのように現れているかを分析した。

出身大学はいずれも圧倒的に東大が多く、次いで北大、九大・京大出身者はそれぞれ出身大学でしか採用されていないことが明らかとなった。また、各大学とも自校出身者は農学部の授業開始から4~6年で最初の自校出身者を採用しているが、九大は15年を経過してようやく最初の自校出身者を採用している。

前職については、東大・北大・京大は助手・副手や講師が多いが、九大だけは官吏が最も多く、次いで他大学教官、という特徴がある。他大学等との間の異動に関しては、東大・九大は他大学等からの転入が転出よりも多い一方、北大は転出の方が多といった結果を得た。

以上のように、農学部教官の履歴を明らかにすることで、大学ごとの教官人事の特徴等を示すことができた。

## (3) 農学府附属演習林財政と帝国大学財政全体、および演習林と地域社会との関係性の解明

亜寒帯林に属する樺太・北海道の各演習林は、自然条件などに恵まれ、また広大な林地を有することができたため、大学に大きな利益をもたらし、財政的な貢献をしていた。一方、その他の地域の演習林は、概ね赤字基調で財政的には貢献することがなかったが、研究・教育的意義や、地域社会との関係から必要なものであった。このように帝国大学の演習林は、それぞれの条件・背景によって規定される特徴をもち、それらに応じた役割を果たしていたことを示した。

また外地演習林について、その地域社会との関係性を検討した。台湾では特に原住民との関係が重要であり、総督府の理蕃政策の一環として授産事業等を行っていた。朝鮮では森林の荒廃が問題となっており、火田対策や生業付与により森林を保護するよう地域社会を変化させようとしていた。樺太の場合は現地工場に用材を提供するなどして、地域経済に大きな貢献をしていた。地域社会との関係では、地域ごとにそのあり方の特徴があることを示した。

これまで大学史ではあまり着目されていなかった農学部附属演習林について、その大学財政上の重要性、および地域社会との関係性について初めて具体的に明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 4件)

藤岡健太郎、帝国大学の朝鮮演習林 九州帝国大学南鮮演習林を中心に、「韓・日学術林研究交流 Workshop」, 2016年3月10日、ソウル大学

永島広紀、朝鮮総督府試験場・水原高等農林学校と九州帝国大学農学部、「韓・日学術林研究交流 Workshop」, 2016年3月10日、ソウル大学

藤岡健太郎、各大学・機関に残る旧外地演習林関係資料の概況、ワークショップ「旧外地演習林研究の地平」, 2018年3月5日、九州大学

藤岡健太郎、大学史アーカイブズと大学演習林、国際シンポジウム2019「アジアから見た、大学演習林 その来し方と行く末」, 2019年2月9日、九州大学

〔図書〕(計 1件)

藤岡健太郎、電子版(九州大学学術研究リポジトリ公開) 帝国大学農学部の形成と展開に関する研究 九州帝国大学を中心に、2019年3月、107頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：新谷 恭明  
ローマ字氏名：SHINYA Yasuaki  
所属研究機関名：西南女学院大学  
部局名：保健福祉学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：10154402

研究分担者氏名：折田 悦郎  
ローマ字氏名：ORITA Etsuro  
所属研究機関名：九州大学  
部局名：大学院人文科学研究院  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：10177305

研究分担者氏名：永島 広紀  
ローマ字氏名：NAGASHIMA Hiroki  
所属研究機関名：九州大学  
部局名：韓国研究センター  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：50315181

研究分担者氏名：陳 昊  
ローマ字氏名：CHEN Hao  
所属研究機関名：九州大学  
部局名：大学院人間環境学研究院  
職名：学術協力研究員  
研究者番号（8桁）：50404108

研究分担者氏名：井上 美香子  
ローマ字氏名：INOUE Mikako  
所属研究機関名：福岡女学院大学

部局名：人文学部

職名：講師

研究者番号(8桁): 30567326

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。